

## ポケットジャーナル



### ★第5回ともしびの賞

13名4団体が受賞

昭和54年度ともしびの賞  
(兵庫県主催)の受賞者が決定し、11月19日午後2時から兵庫県民会館にて贈呈式が行われた。



贈呈式の模様

式は劇団神戸の小倉啓子さんによる「灯の詩」朗読のあと、坂井県知事が「それぞれの地域で、温かい、明るいともしびを灯している方たち、時代を越えて文化を伝承し高めて来た人たちに敬意を表する」とあいさつ、13名4団体に賞が贈られた。また式典につづいて祝賀懇談会もたれた。受賞者は次の通り。

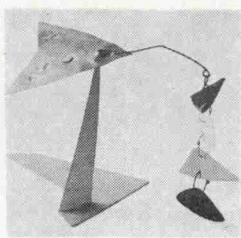
甲南大学古美術研究会(代表笹倉享介)／兵庫西出町木遺保存会(代表杉浦清吉)／速水ヒサ／福沢邦夫／名塩製紙振興会(代表馬場孝良)／中川安一／間瀬福神／浅田芳郎／土井竹治／藤原荒吉／木地三郎／北村登／西村英一／西山謙三／細見末雄／土井武雄／阿万風流踊保存会(代表園生敏彦)

### ★「カルダーの世界」

県立近代美術館で開く

12月22日から2月3日まで

で県立近代美術館で、現代アメリカ美術の巨匠アレキ



作品「真鍮の蛾」

サンダー・カルダー(1898～1979)の全貌を紹介する「カルダーの世界展」が開かれる。

動く彫刻、モビールを生み出したカルダーは、ペンシルバニアのロートン生ま

れ。幼時から彫刻一家の影響を受けてオモチャを創り

工科大を卒業後、木彫や針金彫刻を作り、パリでその「サーカス」作品は喝采を浴びた。以来続々と作品を

自由な遊びの心で制作、造形美術の世界に新しいモビールという動の世界を拡げ

た。今回はモビール30点、スタビル12点、デッサン油

彩、版画から針金彫刻、家庭用品迄142点が紹介される。

これを機に県立近代美術館はモビール「赤い噴水」を900万円で紺育のパールス画廊から購入した。(入場料

700円・高・大(400円)小・中(100円)

### ★関西日印文化協会が

創立20周年を迎える

在阪神間の印度人達と印度びいきの日本人が地道に積み重ねて来た友好の集い

「関西日印文化協会」が20



華麗なインド舞踊

年を迎えて、11月17日午後6時30分

町のインドクラブで、記念パーティーが開かれ、約300人が集った。

ミスターJ・Sチャラ会長、フル・オッシ・インド

誕生日  
ありがとう

運動



十五周年ご支援感謝!!

誕生日  
ありがとう  
運動  
十五周年ご支援感謝!!  
誕生日  
ありがとう  
運動  
十五周年ご支援感謝!!

昭和四十年五月八日、神戸市長田区の室内(むろうち)小学校障害児学級の担任たちの提唱で始まった本運動は、たちまち全国各地の共鳴を得て、順調に発展してきました。最初はほんとうに小さな灯でしたが、今では、運動参加者十五万余名、全国各地の地域社会ボランティア約一百五十名、神戸の本部ボランティア約五十名が運動推進者、そして、狭いながらも専任事務所も開設して、毎日できばきと事務を進めています。運動発足当初から考えると、まるで夢のようです。こうして運動を発展させてください。た全国のみなさん、ありがとうございます。

本運動は、専従者もなくすべてがボランティアによって運営推進されている市民運動というのが、大きな特長です。

また、誰でも手軽に参加できること、一「細く長く」を運動推進のモットーとしているのも特長です。

十五周年行事のひとつとして、「記念冊子の発行」を企画して、目下編集にとりかかっています。今後、今までもどおり「草の根福祉運動」として、着実に推進していき、わが国の福祉が、一歩一歩と前進するよう歩み続けたい。

みなさんのいっそうのご支援と協力をお願いいたします。

誕生日  
ありがとう  
運動  
十五周年ご支援感謝!!

61神戸市暮谷区御幸通ハ一一六神戸国際会館一階の郵便局の隣電話二五一八一六一内線三二六

副領事、桑原泰理理事長なども20年を節として、さらに文化を通じた相互理解を

と喜びの中にも会への情熱を語り、今年、焼失した摩耶山・天上寺へ大理石の摩耶夫人像をインドへ発注して寄付するなどみりの多い会の成果をあげてきた。各国の友好協会の代表を初め集った会員や印度関係者は、花柳芳主さんの舞踊やインド舞踊を楽しみながら、インド料理を味わう集いだった。

### ★80年代の劈頭を飾る アジア音楽祭'80開催

在日アジア人の音楽家総勢百名による「80年代へのメッセージ」アジア音楽祭'80が、1月29日(火)午後6時から大阪フェスティバルホールで開かれる。主催／アジア音楽祭実行委員会他

構想三年、アジア市民大の講座生有志を中心に進められて来た「アジア音楽祭」だけに、主催側の熱の入れようもひとしおで、一人でも多くの参加を呼びかけている。25000円。

★書に生きて今幸せを感じるとき  
春夏秋冬の万葉の歌を、生田神社会館の新しい神楽殿の間で、ローソクの灯が揺れるなか、女流書家の望月美佐さんが、動の書を。藤舎推峰の笛の音を背景に次々と見事に筆が流れる。



あてやかな望月さん

神戸望月美佐の会(神戸市生田区相生町1ノ5ノ1松栄ビル3F)が、11月13日に開かれた。同時に、屏風からきものタピストリー、申の色紙、毛布までオリジナル作品展も催して、美しい日本文字をファッション化して身近に楽しませる鮮やかさは独自の世界。2月には小学館から書の絵本「字かき歌」が上下発刊される。また日曜日の午後6時半、7時迄「望月美佐のビューティフルトーク」のDJをラジオ関西から11月11日から始めて大好評。「女性のためのペン習字」も西東社から来春出版の予定。

### ★神戸出身の社会党委員長 故河上丈太郎氏を偲ぶ

昨年は、元日本社会党委員長浅沼稻次郎氏が右翼の凶刃に斃れて20年、また、河上丈太郎委員長が逝去して15年を迎えたが、11月24日午後、相楽園にて両氏の追悼記念レセプションが行われた。(主催同党県本部)



挨拶する河上民雄さん

挨拶に立った飛鳥田一雄委員長は「河上、浅沼両委員長長の精神を守って大きくはばたこう」と述べ、つづいて三宅正一衆院副議長が両氏にまつわる思い出のあれこれを語った。祝宴に入ってから河上民雄県本部委員長が挨拶、「二人の先輩の魂をそれぞれの胸に抱きながら、この二人を乗り越えられたときに社会党は輝やかしい前進ができると思う」と力強く述べた。

### 美術 ガイド



- ★興立近代美術館  
「カルダー」の世界展 12/22〜2/3
- ★西宮大谷記念美術館  
黒田清輝展 1/12〜2/11
- ★KCCアートギャラリー  
飯家久美自選懐古展 1/10〜2/5
- 備前焼陶友会展 1/22〜2/5
- ★KCCギャラリー  
21回名士賀状展 1/12〜1/18
- 神戸女子薬大写真部新人展 1/19〜1/25
- 妹尾太郎写真展 1/26〜2/1
- ★さんちかギャラリー  
11回書と篆刻展 1/3〜1/6
- フットグループ 1/12〜1/15
- 新春ママの書道展 1/12〜1/15
- 兵庫県日水開水会友展 1/16〜1/21
- 第5回六甲全山縦走スナップ展 1/24〜1/29
- ★キタノ・サーカス  
小清水衛展 1/12〜1/26
- ★ギャラリーあじさい  
現代作家版画展 1/18〜1/27
- 岩瀬憲一個展 1/22〜1/27
- ★シティ・ギャラリー  
松井恵作・松嶋茂勝、日下部一司三人展 1/11〜1/13
- 世界のボスター展 1/16〜1/30
- ★青屋ギャラリー  
小鏡良平版画展 1/15〜1/28
- ★そごう神戸店美術画廊  
宮下寿峰美人画展 1/3〜1/9
- 一松会新春名流書道展
- 備前陶芸展 1/11〜1/23
- 名刺高僧書展 1/18〜1/30
- ★三越神戸店美術画廊  
日本画小品展 1/4〜1/13
- 丹波焼市野舎三作陶展 1/15〜1/20
- 日本の民家を描く、油絵秀作展 1/22〜2/3



づくりの品々の展示即売会が行われた。

これは、月刊英字紙関西タイムアウト紙の購読者や広告主などが中心となって開いたもので、アンティックでは火鉢、タンス、陶磁器、織物の他、奈良の仏教美術品なども陳列され、また、絵画は約40点、さらに、手づくり品では、チュニジアの手織りのカーペット、タピストリー、七宝焼きなど数多くの品々が展覧され、終日賑わった。

関西タイムアウト／神戸市生田区北長狭通2-14-23 賢安ビル3階  
電話332-4533

#### ★戦前日活名画祭

今春、神戸で開催

### 花時計



“地方の時代”を体現

本誌「月刊神戸っ子」

をはじめ全国のタウン誌

11社が協力して全国ネット

の月刊旅行雑誌「旅行

アサヒ」が来春3月号創

刊号として発刊される。

勿論、地域に根ざした

旅行の案内記事だけに終

らず地域情報、つまり文

今やロマンポルノオンリ

ーになってしまった「につ

かつ」だが、かつては、伊

藤大輔、伊丹万作、稲垣浩、

山中貞雄、内田吐夢、田坂

具隆らが名作を次々と生み

出していた。その戦前の日

活映画が神戸で見られる。

1月13日(土)と兵隊／将軍と参謀

と兵／爆音、15日(祝)風小僧旅談

河内山宗俊／江戸最後の日／赤西郷

太、27日(日)血闘高田馬場／丹下左

膳余話百万両の壺／鞍馬天狗角兵衛

獅子の巻／宮本武蔵一乗寺決闘、2

月2日(土)、11日(祝)次郎物語／路

傍の石／風の又三郎、9日(土)汗／

土／五人の斥候兵。会場／神戸文化

小ホール前売1200円、当日15

00円、通し券(5日間セット)35

00円。問い合わせ／ハタケヤマ・アート

ディレクション 電話331-9078

★神戸出身の南海美幸さん

化的催しや四季の行事な

どを詳細に取材する独自

の手づくり記事を軸に、

現在、旅の記事がどちら

かというヤング向けの

ものが主流とされている

が、「旅行アサヒ」では

本格派の年代、アダルト

な旅を中心に編集、流れ

に棹をさす。

本来的に旅のもっている

文化的な、風物に接す

るという特質、自然を愛

し文化に触れるという旅

の魅力を見直そうという

もので、地方に深く根ざ

した文化を発見し、更に

#### 新曲発表「いのち唄」

兵庫高校出身の歌手、内

海美幸さんが「新曲」いのち

唄」を発表、全国各地の有線

放送を中心にヒットしてい

る。内海さんは昭和32年神

戸生まれ。高

校在学中にヤ

マハ・ポピュ

ラー・コンテ

以来同種コンテストで審査

員特別賞や歌唱賞を受賞。

ポップス系の歌を歌ってき

たが、演歌をレコーディン

グ。茶華道をたしなみ、芋の

煮ころがしが好物という女

の子。日本人の心を歌う新

星として張り切っている。



親しんでいたこうとい  
う観点でしぼられる。

「地域の時代」「文化

の時代」という言葉がよく

言われるが、それを実

際に体現しようとするも

のだ。「中央から地方」

の発想を転換させ、東京

もローカルのひとつであ

り、盛り上がるローカル

のエネルギーが結集して

新しい文化を創り出そう

とするものである。

情報を地方発中央へと

いうこの試みにご支援を

いただきました。

△小泉▽

### ●KOBE POST

★タウン誌の草分け「銀座百点」

が30号記念に日本書籍より池田弥

三郎編になるエッセイ集「銀座点

描」(一〇〇〇円)を出版されま

した。おめでとうございます。

★タレントの小山乃里子さんが、

六甲から御影へ転居。〒588東灘区

御影山手五丁目北御影一丁目ナ

イフ三〇八号 電話〇七八(八一一)

〇七五三

★橋本園雪の孫にあたる白砂村莊

事務局長の橋本舞一さんが、この

ほど評論・随筆集「マイウイ論

々」を光村推古書院から出版。十

一月三十日京都ロイヤルホテルで

出版記念会が開かれました。

★画家の石版養生さんが二月のN

H K 銀河ドラマ「夜九時四十分よ

り」小泉喜美子作、冬の祝歌「

のタイロ装画を担当。お楽しみに

に。又、美術公論社から出版され

た「ユキの回想」(ユキ・デスノ

ス、河盛好歌紙)の表紙絵も描か

れています。(二八〇〇円)

★女性のるぼライオンとして活躍

されている佐藤早苗さん(誰も書

かななかった韓国の筆者)が、芦屋

シサイドタウンに未来都市の実

態をルポして、記事を書くため東

京より芦屋へ転居されました。〒

689 芦屋市若葉町4-11-1951

★東京赤坂東急ホテルの3Fで、

しゃぶしゃぶの花くまを、開

いて十年。鶴殿洋子さんが十一月

二十七日より赤坂みずじ通りの皆

川ビル4Fに、ウドン・ソウコの店

「プチ花くま」をオープンしたま

すます意欲的に頑張っています。

東京都港区赤坂三丁目十五ノ一 赤

坂皆川ビル四階 電話〇三(五八三)

★「論」同人の岡見裕輔さんが詩

集「続・サラリマン」(千円)

集、また、なか・千原じんを詩

集「悪い収獲」(千八百円)をそ

れぞれ日東館出版から出版されま

した。

★12月号ポケットジャーナルの朝

比奈千足さんと岡田嘉夫さんの写

真が入れ替っていましたことをお

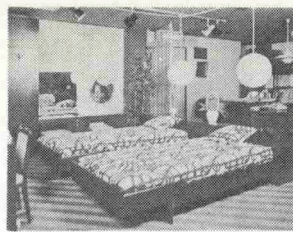
わびいたします。

## 神戸百店会 だより



### ★メーブル不二屋が 創立30周年を迎える

創業は明治8年という神戸家具の老舗メーブル不二屋（トアロード）が、さる11月、会社創立30周年を迎えた。会社組織になってから30年、とはいふもののクラシック家具を手づくりでという精神は脈々と今も生



トアロードのメーブル不二屋店内

きつづけ、「家具」というものは家の宝になっていくもの。年月を経て益々値打ちの出でくるものだ」という先代社長の名言のとおり、ハイセンスな家具を今後も追求していく、という。なお、30周年を記念して永年

勤続の家宝ともいふべき職人さんが表彰された。

### ★紳士シャツ一筋に30年 大丸前の神戸シャツ

婦人服はブレタ・ポルテ全盛なのに、何故か旧弊な紳士たちはオーダーが大好き



河崎保社長

き。生地やボタンから選んで仮縫いをしてき上ったワイシャツは、贅沢な気分になれるからだそう。そんな紳士シャツを手がけることこの3月で30年の神戸シャツ、棚にズラリと並んだ顧客名簿にも歴史を感じさせる。

社長の河崎保さんは、「シャツは大きな流行がありませんが、それだけに基礎的な服として身に合ったものが大切。でも30年の間に色地のシャツを年配の方も着られるようになったし男性

のシャツも華やかになったね」ちなみにこの春は薄地の色生地が多くなりそうとのこと。

### ★名谷ニュータウン 3月15日オープン

着々と進められている名谷ニュータウンのメインコーナーでもあるショッピングゾーンが3月15日いよいよオープンする。

大丸、ダイエーの他、商店が108店舗も入る須磨パティオと多種多彩。西神戸の一大ショッピングセンターになりそうだ。

出店店舗は、衣料品部門ではスキャ、まさ、デイト、シンワ、リザ。文化雑貨ではカメヤ、三宮時計店、リカワ、流泉書房。食料品では、カスカード、亀井堂総本店、ユーハイムコンフェクト、コトブキ、UCC、ベル等、神戸っ子に馴染みの店が多い。

### ★人気のカレンダー 元町の紳士服「ウネ」の

カレンダーは鴨居玲画伯のデッサンを使ったものでこのシリーズ三回目。私の村



鴨居玲のデッサン

の酔っぱらい、世界の女に次いで今年は裸婦デッサン二枚組。毎年好評で数に限りのあるものだから今年もいっぱいだこの様だ。

### ●ショップトビックス

新年明けましておめでとうございませう。本年もよろしくお願いいたします。

★一九八〇年元旦 神戸百店会  
★中川衣業店では1月13日「新春花嫁衣裳展示会」をオリエンタルホテルにて開催します。

★つるや衣業店では1月15日「新春ご婚礼衣裳展示会」をオリエンタルホテルにて開催します。

★お菓子のふるさと、ヨーロッパ8か国から9種類の「伝統の味」の詰合せ「アンバサダー」がモロゾフより新発売。女王陛下の国からはフェーラー社のミルクタフィ、食いしん坊の国イタリアからはベルジナ社のチョコレートステイタ、モルツァルトの国からはホバウエル社のトリュフ。いずれも日本では初のお目見得で500円、3、600円の各種。

★アメリカのコーヒ有名ブランド・ヒルズコーヒをお飲みになりましたか。とてもおいしいですよ。つづには大評判のヒルズブレンド。レッド缶/650円（200g）、ゴールドアメリカンブレンド、ヨーロッパアンクラッシュブレンド、ザ・センチュリーブレンド各1000円（いずれも200g）発売元はUCC上島珈琲本社。

★「オリエンタルホテル・新春バキキング（1月3日～15日）大人四千円、小学生三千円、幼児千五百円。お正月にご家族でいかが。恒例の「結婚フェア」が2月3日PM1時より。お問合せは電話33181111宴会係まで

★ファッションパークのお正月6日/初笑い大会（桂春雄他）、13、15日/フォークコンサート、下旬よりバーゲンセール。

★呉服のみよしや、吉例の年に一回の売りつけし「決算大処分」を農業会館11Fにて開催。1月18、20日の3日間です。



# 影と棲む 1

田口佳子

絵/田中徳喜



またひとつ、晒し首に出会った。

苑子はガラスに鼻を押しつけるようにして名札を読む。全然知らぬ人のものだった。

昌男の母親も、こういう場所でかなり長い間晒されていた。

通りすぎる度に、苑子は気恥ずかしくて目を逸らし、足早に人ごみに紛れたものだ。

個展や茶室での一活けの花は、彼女にはそれを活けた人間の顔に思えて仕方がなかった。ことに、駅に設けられたガラスに四方を囲まれた生花のコーナーは、わざとらしくていやらしかった。人目の多い場所を選んで、名札つきで自分の個性を花に託す、そういう花はどれも一様に腥い。やっぱり晒し首だった。昌男と知り合って間なしの頃、駅の生花コーナーを二人で通過しながら、彼女がぴんとガラスを指で弾いたことがあった。

彼もちょうどウインドーに目を向けていたので

「私、嫌いよ、こういうの……」

という、うん？と問い返した。

簡単に説明すると、煙ったような目つきで苦笑した。「うちのおふくろもやってるよ。結構いい宣伝になるんだそうだ」

そうだったと、その時苑子は思い出した。

昌男の母が茶華道を教えているのを忘れていたのだ。

あの指で弾いたウインドーの感触が、彼の母親との象徴的な出会いといえたかもしれないなかった。

職場で知り合って、初めはそんなつもりの際際ではなかったのに、昌男の熱に押しまくられるようにして結婚の話が具体化した。

彼の家を訪問するために、初めてK駅に降り立った時、跨線橋の中央の辺に設けられたコーナーで、苑子は生花を通して先に母親と対面した。

後日、一緒に暮らした一年足らずの月日の間、昌男の母親は、駅で見た花の貌の印象通りの人物であった。

彼女は今でも、駅であの、自己陶酔型の仰々しい貌を

晒しているのだろうか。

昌男と別れて一年あまりになるが、彼とももちろん彼女とも、一度も会っていない。

カーラーを髪から外し、化粧に取りかかっていると足音がした。

鏡の中の自分が止まる。クリームを拭うためのガーゼのハンカチを指先に絡めたまま、耳を澄ませた。マネキン人形のように、視線も手の動きも固定させた苑子の、研がれた神経の先が足音をたぐり寄せ、人間のイメージに肉づけをする。

一歩ずつ、数えるような響き。履きなれた靴の底が、やわらかく地面に吸いついて離れる無理のない音は父だった。

集金人や配達人、或は近隣の住人の足音以外に、この時間に扉の前で立ち止まるといえば彼しかなかった。だからわざわざ手を止めて確かめることもないのに、彼女は耳を傾ける。扉が叩かれるまでの僅かな時間は、やはりそれなりの小さな緊張感で保たれた。

△今日は来そうだ▽

という苑子の予感、朝の床の中や、洗面所で水を手を受けた瞬間とか、カーテンを引いた音と一緒ににりこむようにして胸を浸した。じわりと、不確実であって密着度の濃い、そのくせ風のような感覚が彼女を捉える。見えぬイメージに縛りつける。

一つの予感が生まれると、それが実現するための現実の铸型がどこかに用意された。

铸型に合uhn時は、生まれた予感は単に一つの不確かな感じとしてのまま漂いつづけねばならない。しかし、父親に関してのそれは、狂ったことがなかった。

朝、紅茶をスプーンでゆっくりと掻き回していると、その小さな褐色の渦から、

△あ、今日は来る▽

と思った。その時、苑子は父を皮膚全体で感じとる。

相手の存在を、たぐりよせているのかよせられているのかよくわからない。

わかつているのは、お互いの存在感がその一瞬に、他者との繋がりから離れて際立っているに違いないということだった。

相手も多分、床の中や洗面所や、また、彼の毎朝の習慣である目ざめに飲む濃い煎茶の香りの中で、

「今日は行ってみようか」

と思っているのではないかということだ。

一度、それを確かめたくて、父が来た日に

「今日はここへ来よう」といつ思ったの？」

と訊ねてみたことがあった。

彼は不審そうにゆっくりと目をしばたかせて、ちょっと考えて口ごもったが、

「いつって：顔を洗いながら思ったよ」

と答えた。それが苑子の心の鍵孔みたいな部分にかちつと嵌まった。その後、二度と訊ねようとは思わなかった。

何度か確かめれば、きっと予感の外れた時やちぐはぐな思いにも行き当たっただろう。

だから苑子は訊ねなかった。父親と自分の空間はロックされて、今もって何びとたりとも入ることはできない筈である。

ドアが叩かれた。

ぼと、ぼとという聞きなれた遠慮っぽい音である。開く瞬間はほろ苦い。

微笑ともいえない薄っぺらな笑いを一度だけ頬にさっと片よせて、苑子は「ああ」と頷く。とびつくようにして扉を開き、体全体で招き入れた日はもう遠くなってしまう。

それが時として、何だか後ろめたい思いである。

入ってくる時、彼は決まって狭い三和土の上に目を落とす。苑子以外の履物がないかどうかを確かめているのだ。そうしながら、のれんの下から視線をのろりと這い

こませて靴を脱ぐ。誰もいない部屋に上がり、食卓の前に坐るまで、一言も口をきかない。

坐って、一服吸いつけてからも黙っている。苑子の化粧の手がまた動き出した。

「紫陽花が咲いたよ、今度持ってきてやろうか」

父は鏡の中の苑子に話しかける。

部屋には装飾らしいものが何もなかった。嫁いだ時の荷物は、離婚して婚家から運ぶ途中で家具類は処分して、中身だけを衣裳箱に詰めて運びこんだ。

花瓶一つ、それらしいものがないのを佻しいと思う間もなかったし、少し落ち着いた今も別に買いたいとは思わない。

一人で、ただ生活するだけのすっぱりした部屋を好ましいと思っている。

「いらないわ」

「あんなに紫陽花が好きだったじゃないか、土を替えて今年はピンクのきれいなのが増えたよ。あれも仲々いい」  
「欲しい時は花屋で買うから」

植え込みの多い実家の庭を思った。

昌男と暮らした高畑家の庭も、植え込みが多かった。苔や水が配されて、植物の何かを通してしか陽の当たらぬ土の部分は、いつもじととやわらかだった。

化粧を済ませ、着替えるために、三面鏡を置いた板の間と、父が坐っている畳の間を仕切るカーテンを引く。

身を縮めながら着替えた。父はこうして、苑子が店へ出るまでの午後の僅かな時間に来ることもあったし、朝昼兼用の遅い朝食の時などにもやって来た。

いずれにしても、限られた短い時間を、別にこれといった話もなく、町角で彼女が幼い時から好物だった焼栗をみつけたといって、一袋買って来たり、「間に合ってよかったな」と、ほろ温いフライド・チキンの紙箱を開いて自分も一緒に食事をしたりした。だから、女の一人暮らしの部屋なのに、流しの横の小さな食器棚には、男物の茶碗や箸が父用にいつも用意されていた。





父の生活はかなり自由で、現職を退いても、長年の貿易事務の経験が買われて、自由出勤の形での仕事が絶えることがなく、その合間を縫って苑子のアパートに出入りし、泊まって行くこともあった。

苑子の支度が整うと、二人は部屋を出る。

施錠の金属音にも慣れた。三十歳まで親の家にいた彼女にとって、一人きりの生活を守るアパートの鍵は、初めの頃は安全性を約束するより孤独の象徴のような気が

したものであった。

父は知らん顔でさっさと先へ行く。

隣り近所の住人と顔を合わせても、会釈もしなかった。こんなにちはと声をかけられても、行っていらいっしやといわれても苑子が腰をかがめる。

何とはない好奇の色はどの人の眼にもあり、何人かが集まっている傍を通り過ぎると、背後で話声がふいと止むのは、あまり感じのいいものではなかった。



移り住んだ当時は、「父ですの」といっても信じていない人の方が多いようだった。

今もって、その辺のことはどうかわからない。長身で、六十歳を越した今も、ブルグレイのスーツをびたりと着こなす彼と、職業柄、華やいだ雰囲気、装いの苑子とは、あまり容貌も似ていないし、並べばちよつと味のある男と女の間柄に見えても仕方がなかった。若い頃はそれが自慢だった。

どこへ出かけるのも、父と娘は一緒に、母は排された。

買物をする時、日頃はお父さんと呼んでいる彼女が、わざと語尾を曳いて「パパア」というと、店員たちは決まって愛想笑いに皮肉を刷いた。それがひどく満足だった。娘の頃の苑子は、平々凡々と、年月だけを情性的に重ねたような夫と妻の立場より、世間一般が認めぬ隠れた男女の立場の方が本当の愛であるような気がしていた。

自由で、緊張感と不安感に揺られる一日一日に、純粹な本音がエキスのように詰めこまれる：そんな甘い空想の揺がりがあった。

同じような年格好の男友達は、皆どこか共通した頼りなさで退屈さで、苑子の心を惹き止めもしなかった。

品物を娘が選び、父親が支払う。幸せな安定した場面を、他人の曖昧な皮肉っぽい微笑や、わざとらしい無表情が状態を一変させる。そこに置かれた父と娘が、艶っぽい男と女にすり替えられる時、苑子の茶目つ気たつぷりの満足感に、いささかの秘密めいたよろこびが加わっていた。本当に、そういう立場の女になったようなくすぐったい錯覚だった。

もう、買物に二人で行くことも、コンサートや展覧会に出かけることもなくなってしまった。芸術的なもの一切を解さぬ母に比べて、幼い頃から感受性豊かな、美しいものに強い憧れをもつ苑子を、父がどんなに愛し、大事にその感情を育てようとしたかは、苑子自身が一番よく知っていた。

この頃は、時間的に余裕のないせいもあるが、やはりどこことなく弾むものが萎えていた。それを寂しいと思う束の間の思いさえ、現実の生活での些細な出来事が攫って行ってしまう。

「じゃあな、そのうちにまた来るよ」

「ええ、気をつけてね」

二人は別れる。

父はいつものように、骨董屋を覗いたり、古本屋で時を潰したりして家に帰るだろう。

後ろ姿は見るのも、見られるのもいやで足早に人ごみの中にずるりと紛れた。

駅までの道を並んで歩きながら、父は一度家に帰って来ないかと何度も誘うようにいった。苑子は、結婚してから折りにふれ、家に入りにしていたが、昌男と別れてからは一度も帰っていないかった。それを父は、世間体を気にしていると思っているらしい。

「お母さんも最近、弱ってな。時どきお前に会いたいといっている」

一度折りを見て帰ってやってくれと、今度は頼む口調になっていた。苑子は答えなかった。会いたければ自分が来ればいいのだ。母は苑子のアパートに一度も足を向けたことがない。苑子も来いと誘いもしなかった。

父は、じゃあいつものように、ちよつと足を止めて片手を胸の辺まで上げる。

あとは人の波が二人を呑みこんだ。

バスを降りて歩きはじめてから、サングラスをかけた。眩しく白い陽を反していた初夏の町並みが鉛色に沈んだ。色彩とは不思議なものだ。

陽の下で、家も木も石も電柱も、サングラスのレンズを通すとびたつ呼吸を停止した。

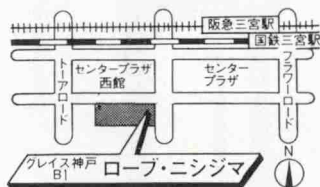
△つづく▽

。 クリーニングから  
ファッション・メンテナンスの  
スペシャリストへ



ローブ・ニシジマのサービス内容

- ファッション・メンテナンスのすべて…型くずれの防止、素材感の回復、お客さまの好み通りの仕上げ
- いつまでも美しく着るためのアドバイス



神戸市生田区三宮町2丁目11  
グレイス神戸 B1 ☎(078) 332-2440(水曜定休)

ハイセンスの紳士服で  
最高のおしゃれを



三恵洋服店

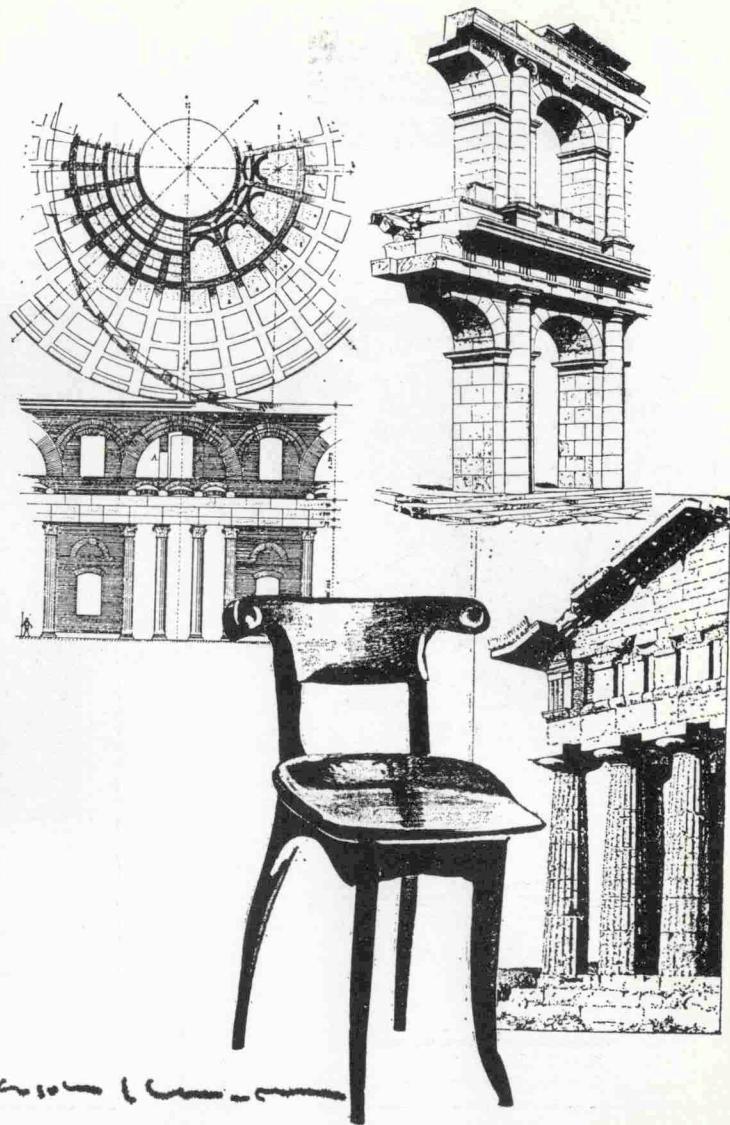
神戸・元町4丁目 ☎(078) 341-7290

第4回神戸文学賞受賞作品

# 溶ける闇

高木敏克

絵／木村光佑





いのちに返答ができるものなら、  
いのちの答えは心臓と眼と肺から出る。  
大都会の商店と四辻の真中から躍り出る。

W・H・AUDEN

＜SPA IN 1937＞

石灰岩の大地には、わずかばかりの灌木がへばりつき、  
必死で自分たちの土を握り締めている。その黒々と点在  
する繁みを繋ぎながら、鉄道は銀色の長い根を延ばし、  
泡のように海に被さる白い半島に食い込んでゆく。純白  
の岩盤の上を走る列車の青い影は、ようやく白みかけた  
水平線を暗示していたが、やがて朝焼けが列車の窓を突  
き抜けて、パステルカラーに岩肌を染めあげる。

夜行列車は地中海を左に見ながら、バルセロナの港の  
近くに停車した。放り出された多くの体が海岸通りを西  
に真っ直ぐ歩くと、つきあたりの広場の中央では記念塔  
が長い人差し指のように大空を突き刺している。広場の  
ベンチには盲目の男が一人、腰を掛け、しきりに鳩の啼  
き真似をしている。石畳の上には、数羽の鳩が紫陽色に  
首を輝かせ、長すぎるぼくの影めがけて近付いてくる。  
ぼくはポケットのゴロワーズを握り締め、手の間から落  
ちる煙草の屑に目をおとす。そそくさとひっかえす鳩を  
見ながら、火をつけると、煙草はズボンの中ですっかり  
汗をかいていて、煙を吹きあげると全身の汗が青空一杯  
に蒸発し、また一息吸い込むと、今度はぼくの体が大き  
に吸い込まれるのだ。

羽音は突然鳴った。青空に散弾銃の穴をあけながら、  
鳩の群が旋回すると、広場の敷石をカタカタ鳴らして、  
花売りの荷車がロバに曳かれてゆく。ベンチの男はサン  
グラスに無数の鳩を映し、花売りの老婆を罵っている。

それに応えて荷車のロバは大きな耳をピクピクさせて、  
あわれな声を張り上げる。男は宝くじを売っている。首  
から紐で吊した板の上には、ひらひらと白いくじ札が、  
波の形に揺れている。白波を蹴立てて吹きあげる風に乗  
り、港湾労働者の靴の音、あるいは敷石を鍵盤のように  
敲くハイヒールの踵、さらには風の中を吹き流しのよう  
に駆け抜けるオートバイの帯状の黒い音が聴えてくる。  
それらが少しずつ広場の静寂を崩してゆくと、盲人は白  
い杖でカタカタとリズムをとりながら、万人のための  
宝くじ、あなたのための宝くじ、一万倍の幸福のため  
には、一万分の一になれ。と叫ぶのだ。盲人の声が広場  
を走り抜け、ゴチック建築群の壁にぶちあたると、それ  
を誘い水にして、群衆の雑踏が激しい咀嚼音のように近  
付いてくる。人々はゴチック建築の谷間から空まで震わ  
す唸りをあげ、地の底から盛り上がる呼吸のようにうね  
りながら吐き出されてくる。そこには女陰の形の門があ  
り、そこから奥にはプラタナスの並木道が青々と繁り、  
産道のように暗いトンネルをぶちぬいている。激しいエ  
ネルギーの音はそこから聴えてくるのだ。群衆は岩の門  
を踏みたおしてなだれこむ群衆の勢いで、一瞬にして広  
場を埋めつくし、逃げ場を失った多くの体は何時のまに  
か、城壁のように林立するゴチック建築群の壁に張り付  
いている。目の前の石の壁は柔和で汚れた様々な彫刻を  
連続させながら、朝の光に晒され、さらにその細部にお  
いては、一つ一つの石の結晶を非常に鋭い、零れそうな  
光の乱反射に分解してみせる。また、壁にはどす黒く、  
人の手垢、汗、血、その他様々な排泄物が附着している  
が、それら黒々として生活の痕跡は石の結晶と結晶の間  
に忍び込み、壁の内部の暗闇と結びつこうとしている。  
壁の内部では、石の重量が静かに、動くことなく地中に  
沈みこみ、地上のゴチック建築と同じ形の闇の建築を、  
深く埋めこんでいる。ぼくの体は、石の重心に向けて壁  
に吸い寄せられ、さらに建築群の中心に向けて闇の門を  
通り抜け、暗い並木道に吸いこまれてゆく。石造建築に

深く切れ込んだ谷底に並木は続き、見上げると岩壁の上部から埃のような光線が降ってくる。プラタナスの緑はその下で震え、やがて耐えられなくなると、太陽のかけらを群衆の上に零す。木漏日は人々の栗毛を突如として金髪に変え、緑眼を碧眼に変える。その度にぼくの睡眠不足の眼球は赤い血管に被われる。光が眼球に突き刺さり、色彩を網膜に焼き付ける。ちらちらと人々の視線は乱れ、乱雑に並んだテーブルに肘をついて語りあう男女の白や黒や褐色の肌に、プラタナスの緑、パサソルの赤、日除けテントの黄色が舞い降りる。それらはさらに太い男の腕や女の腿に華の輝きを与え、吹き出しそうな歓喜に満ちあふれ、様々な国籍を乱交させている。彼らの視線が笑いながら、ちらちらとぼくを見る。それも木漏日のせいで、ぼくの姿がちらちらとしか見えなからだ。

先程から、ぼくは一つの椅子に着こうとしている。睡眠不足のせいで、もう歩き疲れているし、喉も乾いている。そして何よりもこの舞い狂う光の激しさに眼をやられている。ぼくはまったく自由に一つの椅子を選ぶことができる。手荷物をテーブルの上に置いてから、リュックサックを地面に置けば、ぼくは彼らのように坐ることができる。だが、まったくの任意性のただ中にありながら、ぼくはその華やかな光の世界におじけづき、単純で不自由な歩行を延長している。そうしないとぼくの肉体はばらばらに分解しそうなのだ。木漏日が人体を様々な色彩の断片に分解し、コスモポリタンたちの花の表情を、咲き乱れるコスモス畑に変えてゆく。だからぼくは歩行の不自由さにしがみつki、肉体という牢獄に自分を閉じ込めようとしている。誰もぼくのことを見るな。ぼくについて語るな。そしてぼくの前では単なる映像になり、無関係な彼、彼女、そして彼らとしてだけ存在すればよい。と思ったとたん、いきなり人並を破って駆けぬけてくる少女が二人、叫びながらぼくに飛びかかりそうになった。一人は長い黒髪で、もう一人は綿のような黄色の巻毛だが、二人とも同じ色のジーンズをはき、手をつな

いだまま腰骨でぼくにぶつかった。その感触を大切にかけこみ、それがどちらの女のものかと振り向くと、歩道の脇に一台のシトロエンが停車している。車の窓には三人の少年の顔が待っている。少女たちが窓から飛び込むと、二つの大きなお尻がつかえて両脚をばたかせている。中の少年がそのまま二人をひきずりこみ、ブラウスがまくれ、白い肌に黒いブラジャーが見え、なおもぐいぐいと腕や首をひっぱられながら、男に抱きついて、音の出る接吻の後、やや落ち着いて、車の中にお尻をしまいこんだが、後の座席の男女は重なったままだ。そのままお尻を振りながら、シトロエンはおどけたクラクションで走り去る。あちこちに爆笑が沸きあがり、ぼくの顔もグニャグニャになっているのは笑っている証拠だ。横の女は中年で、東洋人も笑っていると言っては笑っている。よく見ると、この古びた女には同時に二つの顔があり、その一つは人なつっこい淋しさ、もう一つは爬虫類のように堅い皮膚で威厳にしがみつこうとする惨憺さ。その二つが重なって見えるのも、きっと木漏日のせいだ。どの顔もどの顔も陰りの中では優しくほえみ、光の中では髑髏のように冷たく輝く。ぼく自身も光の中で緊張し、驚りの中で安息する。そうだ、スペインの驚りの部分には安息という言葉がよく似合う。たとえば並木の間から容易に垣間見ることのできる中庭の噴水のあたりでは、一瞬空気の静止した空間に出会うことができる。安息を求める人々は、そこで精神を垂直にたちのぼる祈りの形に静止する。まるで時間まで止まったようだ。そこには一つの椅子がぼくを待っていて、長い沈黙を溜めている。ぼくは巨大なリュックサックの重量から逃れるために背筋を伸ばし、両親指を肩に食い込んだベルトに差しこみ、背骨を左右によじる。投げとばされないようにベルトを外し、ゆっくり抱き寄せてからリュックは地上に寝かす。

中庭から駆け抜ける風が石壁を伝って背中の中を奪い去る。背中を石に押し当てて眼を瞑ると、噴水の音が中

庭の中心を決め、その周囲では鳩の声が水玉の音と対話している。目を開くと、カフェテラスのテーブルの間には何本もの石柱が立ち並び、アーチ状の内壁を支えている。内壁のただれた大理石は石灰水をしたたらせ、様々な文様を描いている。その上を一匹の蝸牛がゆっくりと

が氷とガラスの間に注がれるところだ。氷は身震いして少し溶け、ごろりと寝返りをうって浮かび上がる。噴水の鳩たちが眼の色を変えて近づいてきたのはその時だ。首筋をそろえて群がる鳩たちの中心には、何やら転がる物があり、鳩をてこずらせ、足の爪でつかみかか



登りつつある。背中重量に悩まされ、垂直に移動する。ぼくは呪いのつもりでジュードランジュと給仕に告げて、眼を閉じる。すると蝸牛の残像がしだいに大きくなり、ついにぼくの体より巨大なものとなったので、あわてて眼を開くと、給仕の大きな手の中からオレンジジュース

つてもつかまらずに球体はどんどん近づいてくる。ようやく見えそうな距離になったところで給仕の足が踏み潰す。いきなり液状に変化して、砂の中に吸い込まれそうになった生物は、再び全身の力で収縮し、蝸牛の形を再現してみせたが、翼を拡げて大喜びの鳩たちに、様々な



ベクトルに分解され、その形は断片に、その軟体は粘液に、その悲しみは悦びに変化して、鳩の平和な胃袋に流れ込む。とすると、それは先程壁の上に見た蝸牛かと思ったが、再び眺める壁の上には数匹の蝸牛が群がり、どれがどれだか分らない。それどころか、あちこちのテーブルには焼きあがった蝸牛が美味そうな匂いをたてながら運ばれてくる。おそらく、壁の上の蝸牛は野性のもではなく、このカフェテラスの奥の調理場から逃げだしたものにちがいない。いわば脱走犯だ。それに蝸牛は単なる食物だと思うと、なんとなく落ち着いて、その安心を確かめるために、ぼくはエスカルゴとビールを注文した。空腹と睡眠不足のため、ビールは喉からいきなり背骨に染み込んで、頭のとっぺんから青空に蒸発してゆく。目蓋が重く痺れ、その痺れが全身に落ちてゆく。すると蝸牛の残像が再びふくらみながら近づいてくる。よく見ると、それは蝸牛ではなく、今朝、港の広場で出会った盲人が。盲人は杖を触覚のように操り、ゆっくりとランブラスの並木道をのぼってくる。ぼくの前まで来ると、立ち止まり、ぼくの足下を杖で探り、△そこをのいてくれ△と言う。△どうして△と尋ねると、△そこに忘れものをした△と言う。△それは何か△と聞くと、盲人は黙ってサングラスを外す。右眼には眼球がなく、真暗な眼窩がはっきり開いていて、そのため顔の中は空洞に見える。左眼にも眼球はないが、その代りに大きな蝸牛が埋めこまれている。その渦巻状の目玉のため、これは何かの冗談だろうと思ったかったが、いつまでも席を立たないぼくにいらした盲人は、いきなり杖を振り上げて、ぼくの脳天に一撃を加えた。眼の前が真赤になり、その赤がいつまでも消えないので顔を拭くと血だ。全身の筋肉が震えだし、その震動をすべて右腕に集めて、ぼくは盲人の顔をなぐりつけた。ああむけに倒れた盲人の顔から眼球がころげ落ち、鳩たちがそれを追いかける。しばらく盲人は眠ったような息をしていたが、突然両唇を下にピクピク痙攣させ、白い歯を奥歯まで見せながら、

泡を吹き出し、背中を二三回ゆすったかと思うと、喉を引き裂きながら、喉のさらにさらに奥から、この世のものとは思われぬ鋭い叫びをあげ、そのあまりの大きさに壁の蝸牛は総て地面に落ちた。やがて盲人の眼窩から触角が伸び、耳からも鼻の穴からも柔らかなで半透明の触手が現われて、わなわな震え、大気の中に手掛りを求めていたが、やがて大地を探り当て、ぜいぜいする息が口の泡を吹き飛ばし、泡はおびただしい量の粘液に変質し、それが彼の皮膚や衣服を溶かし始め、ぬめぬめと輝きながら、なめらかな白い肌に青い血管を浮かび上がらせ、青黒く内臓のありかを示すのだ。

悪い夢を見たものだ。何もかもあの鳩のせいだ。ぼくの顔には粘り鳩の糞が張り付いて、向こうの隅から一人のアラブ人が笑いがらばくを見ている。いたたまれなくなったぼくは席を立ち、再び並木道を歩いてレストランを探した。

(つづく)

## 月刊神戸っ子1980年新年会

・こあんない・

1月14日<月> 午後6時より

神戸・元町・風月堂ホール

会費 <¥4,000>

・プログラム・

第4回神戸文学賞受賞式他

大変なごやかな文化交流会です。

ぜひご参加下さい。

・お問合せ・

月刊神戸っ子 tel 078 (331) 2246